
話しかけ—クライシス

玉城沙希斗

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

話しかけ―クライシス

【Nコード】

N4485P

【作者名】

玉城沙希斗

【あらすじ】

道を歩いていると必ず誰かから「話しかけられる」主人公・篠原准一。

彼がある冬の日にく少女と会った。

彼女との出会いによって主人公の運命は徐々に変わり始め、彼の生活はおかしな方向へと進み出す。

プロローグ（前書き）

まだまだ修行中の身です><；
つたない文章ですが、よろしく願います。

ブローグ

彼女は一体何を考えているのだろう。

夕方の公園で俺が出会ったのは、木枯らしに葉を散らした木に背中を預けている少女だった。

ミルクティーと同じ色をした瞳はどんよりと曇った空を見上げていて、どこか悲しげな表情をしていた。首には白いマフラーが軽く巻かれていて、それと対照的に手袋は黒かった。

ふと少女が横を向き、偶然にも俺と目が合う。

「寒いですね」

「冬ですから」

「そうですね。冬ですもんね」

そしてまた視線を空に向ける。俺もつられて見上げてみたけれど、彼女の見つめる先には特に変わったものはなかった。灰色の雲が流れていくだけの光景に、彼女は興味をひかれたのだろうか？

「何を見ているんですか？」

今度は俺から声をかけてみた。

少女はすぐに答えなかった。白い息を一回だけはいて、こちらを向いた。

「どうして、曇っているのかなと思って」

「この季節はいつもこうですよ。春になるまでほとんど晴れません。あの雲は雪を運んでくるんです」

「そうなんですか」

少女の視線がまた空に戻った。

この天気を気にしているということは、彼女はこの街の住人ではないのか、それとも引越して着たばかりの人なのかもしれない。

ここに暮していれば冬の悪天候は当たり前のことだからだ。

「あの」

「なんですか？」

今度は空を見つめたまま、少女は俺の声に答える。

「あなたはこの街に来たばかりなんですか？」

「まあ、そうです」

「なるほど」

どこに越してきたか聞こうとして、とつさにやめた。見ず知らずの異性にそんなことまで聞かれると彼女が警戒してしまうと考えたからだった。

「この街の西の方は、水野地区と言っただけ？」

「え？ええ、そうです」

「そこに越してきたんです」

「そうですね」

奇遇だ。俺の家があるのも水野地区。だけど近所に誰かが引越してきたなんていう話は聞いていない。たぶん同じ地区でも離れたところに来たのだろう。

「前に住んでいた街は、冬は曇ってなかったんですか？」

「曇っている日もありましたけど、晴れている日も同じくらいありました。この街に来てからまだ一度も晴れた空を見ていません」

「晴れた空を見るには春まで待たなければいけませんよ。冬の間はずっと曇ったままです」

「そうですか」

意外にも彼女はそこで笑みを見せた。悲しげだった表情が一転して、明るい顔になる。彼女一人の変化で、その周りもなんだか明るくなったように見えた。

「それは、春が楽しみになりますね」

「冬はつらいですけど」

「冬はそういうものなのでしょう？」

「そう言われれば、そうでしたね」

思わず声を出さずに笑ってしまった。彼女につられたわけじゃないけど、なんだか気持ちが明るくなったような気がする。

少女が空から視線をはずして腕時計に視線を向けた。女の子らし

い、小さくてきれいな時計が見えた。

「すみません。そろそろ時間なので、私はこれで失礼しますね。突然声をかけたりして、すみませんでした」

「いえいえ。なかなかおもしろい時間でしたよ。それに人から話しかけられるのには慣れていきます。そういう運命の下に生まれたくて、いろいろな人に話しかけられるもので」

「おもしろい人ですね」

彼女はまた微笑して、小さく一礼した後公園の出口に歩き去った。俺も早く家に帰ろうと反対側の出口に向かう。今日は本当に寒い日で、彼女と話している間にすっかり体温は下がってしまった。

けれど、なんとなく、彼女と話せたことはとても幸運なことだったように思う。少女が今までであった女の子の中で格段に綺麗だったからではなく、ただ本当になんとかなく、彼女と話せたことは自分の人生にとって重要なことだと、無意識のレベルで感じていた。

その気持ちが正しいと分かったのは、彼女と始めた会った冬が終わり、高校二年生の春がやってきた頃になってからだった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4485p/>

話しかけ—クライシス

2010年12月12日05時41分発行